

# 平和の哲学 寛容の智慧

イスラムと仏教の語らい

インドネシア共和国元大統領

アブドゥルラフマン・ワヒド

創価学会名誉会長

池田大作



潮出版社

# 平和の哲学 寛容の智慧

イスラムと仏教の語らい

インドネシア共和国元大統領

アブドゥルラフマン・ワヒド

創価学会名誉会長

池田大作



平和の哲学 寛容の智慧  
イスラムと仏教の語らい

二〇一〇年九月五日 初版発行  
二〇一〇年十二月十日 二刷発行

著者

アブドウルラフマン・ワヒド

池田大作

発行者 南晋三

発行所 株式会社 潮出版社

〒一〇二-八一一〇 東京都千代田区飯田橋三-一-三

電話〇三-三三三〇〇七八一（編集部）

〇三-三三三〇〇七四一（販売部）

振替〇〇一五〇五六一〇九〇

<http://www.usio.co.jp>

印刷・製本 大日本印刷株式会社

©Abdurrahman Wahid, Daisaku Ikeda 2010,  
Printed in Japan  
ISBN978-4-267-01856-5 C0095

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。  
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）  
することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出  
版社の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小  
社あて許諾を求めてください。

平和の哲学

寛容の智慧

——イスラムと仏教の語らい——

目次

永遠なる平和を目指す対話　グミラル・ルスリワ・ソマントリ……1

第一章　平和こそ宗教の使命……11

第二章　世界に架ける友情の橋……41

第三章　青春の苦闘と人生の探究……69

第四章　人権の世紀への挑戦……97

第五章 文化交流は創造の源 …… 123

第六章 寛容の原点と歴史 …… 151

第七章 教育は未来の黄金の柱 …… 201

第八章 新時代を開く女性と青年 …… 227

引用参考文献・巻末注 …… 258

## 永遠なる平和を目指す対話

グミラル・ルスリワ・ソマントリ（インドネシア大学学長）

二十一世紀のゲート（門）としての二〇〇一年は「国連文明間の対話年」として幕を開けた。二十一世紀は多くの不明確性をはらんだ新しき千年といえる。しかし、九・一一テロ事件が世界の良心を引き裂いたこの新しき千年の始まりがいかなるものであったかは周知の通りである。さまざまなテロ事件や中東における紛争は、文明間対話がいかに世界市民間の新たなコミュニケーションスタイルでなければならぬのかを示している。文明間の衝突は経験上、否定されるものではないが、世界市民はこの経験的現実に屈してはならないのであり、永遠なる平和を実現する希望を育み続けなければならない。

この地球における人間関係のあり方は二つしかない。それは紛争か調和かである。紛争は個人

および集団のエゴイズム（利己主義）が牽引するものであり、その行く末は対話の拒否である。紛争は人間性とその土地にある文化を萎縮させる。個人および集団は互いに閉じた関係となり、その結果として他者および他の集団の人間の側面を見えなくしてしまう。相手を警戒すべき「敵」であると決めつけ、必要となれば先制攻撃として相手を破壊する。一方、調和には信頼と尊敬と自尊心に根ざした個人または集団の相互関係が躍動している。この相互関係は個人・集団が自ら進んで対話と協力の扉を開いた時にのみ実現可能となるものである。対話とは人間と人間の調和関係におけるキーワードなのである。対話がなければ、不信感と疑心により息苦しい関係となり、それが攻撃性や敵対へと変貌してしまう。

真の文明間対話とは社会的背景、文化、宗教の異なる具体的な二人の人間による対話である。

池田大作氏とアブドウルラフマン・ワヒド氏は世界の声望ある宗教指導者である。池田大作氏は堅忍不拔に仏教思想の人間主義の価値観を世界中に啓蒙する創価学会インタナショナル（SGI）会長である。アブドウルラフマン・ワヒド氏はインドネシア共和国第四代大統領であり、インドネシア最大のイスラム団体ナフダトゥール・ウラマ（NU）の議長を務めた。氏は穩健的ムスリム知識人として国際的に知られ、平和のための宗教間対話を振興し続けてきた。

真の対話と会話は文化的舞台の上で作用するものである。池田氏もワヒド氏もまず初めに文化的宗教者としてではなく、宗教的な文化人であると解されるべきであろう。池田氏は高名な詩歌

により日本中に知られており、ワヒド氏はジャカルタ芸術家協会に在籍し国内外における文化芸術作品に親しんでいる。二人の芸術に対する親密さは、裁定されることのない開かれた宗教的對話を可能にしている。哲学者マルティン・ブーバーは、宗教的對話が実は開かれた精神と思考に掛かっているとしている。對話において、人は相手を知り、また自身を知ってもらうべく己を開かなければならない。對話とは誠実で相互的な信念の出あいなのである。

開かれた對話のあり方は池田氏とワヒド氏が互いに相手国の文学者を称えあっていることから明らかである。池田氏はプラムディヤ・アナンタ・トゥールについて作品を通じて人間主義思想を啓蒙したインドネシア最高峰の作家であると評価しており、またワヒド氏は川端康成を日本の現代のおよび伝統的な表現の美しさを融合した日本の作家として賞讃している。このことから二人の偉人の對話は自らを美化することではなく、相手に対して自らを開くことを実践しているのがわかる。簡素な形ではあるが、この二人の人物の對話は我々に対して単なる讃嘆ではなく平和のための對話はいかにあるべきかを教示している。

預言者ムハンマドと釈尊に関する二人の對話は読んで非常に興味深いものである。この對話により、預言者ムハンマドも釈尊も共に平等と協和を啓蒙したということが結論づけられる。預言者ムハンマドは愛情の宗教たるイスラムを説き、敵対の引き金となる種族主義を拒んだ。また預言者ムハンマドは各自の宗教に基づいて宗教上の勤めを行うことについてマイノリティー

（少数派）を保護した。一方、釈尊は「生れを問うことなかれ。行いを問え。火は実にあらゆる薪から生ずる」（『ブッダのことば』中村元訳、岩波書店）と説いた。平等と協和の教えはフアナテイック（狂信的）な人が往々にして忘れてしまふ宗教的真髓である。

池田氏とワヒド氏の他のさまざまな対話の場面では、異なる宗教を信仰する具体的な二人の出会いを通じて、永遠なる平和を目指して歩むための共通点をいかに見出し出しているのかが示されている。平和とは我々が安易に享受できる状況のことではない。平和とは戦い勝ち取るべき希望なのである。ここでの戦いとは武器による戦いではなく、思想による戦いのことである。対話は他者の特性を考える努力をすることと、さらなる道のりを共に歩むために多くの共通点を見出すことから始まる。結婚に例えれば、共通点を見出せない二人の間では互いに縁がないのと同じである。我々が互いに差異を強調し続けて対話の扉を開かないのであれば、平和が実現することはない。私は池田氏の以下のような言葉に心を打たれた。

「憎しみ」や「排他」の心でひび割れ、「不寛容」で乾ききった大地も、「対話」という水を一滴ずつ染み込ませていけば、「信頼」と「友情」の沃野は広がって行く――。

二〇一〇年七月三十日

平和の哲学

寛容の智慧

——イスラムと仏教の語らい——

目次

永遠なる平和を目指す対話    グミラル・ルスリワ・ソマントリ …… 1

第一章    平和こそ宗教の使命 …… 11

第二章    世界に架ける友情の橋 …… 41

第三章    青春の苦闘と人生の探究 …… 69

第四章    人権の世紀への挑戦 …… 97

第五章 文化交流は創造の源 …… 123

第六章 寛容の原点と歴史 …… 151

第七章 教育は未来の黄金の柱 …… 201

第八章 新時代を開く女性と青年 …… 227

引用参照文献・巻末注 …… 258

装丁／カバー写真 鈴木正道 (Suzuki Design)  
巻頭口絵写真提供 聖教新聞社

平和の哲学

寛容の智慧

——イスラムと仏教の語らい——

本文の引用文中に付けられたルビは主に編集部によるものです。  
引用文自体にルビが付けられていた場合は、それによりました。

# 第一章 平和こそ宗教の使命